12 月 7 日(土)13:30～16:00 定例学習会報告

会場／大友氏遺跡跡：南蛮 BVNGO 交流館研修棟

① 役員・会員近況報告　（牧・若杉・佐藤・大塚・藤田）

2 ヶ月休んでいた牧達夫名誉理事長がその間の報告をした。全国老人クラブ副会長に就任後、全国大会等に出席、そのほか自治会や行政の諮問機関にも在籍、また、さまざまな団体の役員をしている関係で多忙を極めている。そういった場所で折を見ては大友氏の話をしている。年明け早々佐藤県知事のスケジュールに合わせ NHK に陳情する予定である。その資料は佐藤弘俊副会長が制作中。

同じように若杉、佐藤、大塚、藤田各氏は他団体にも所属し、そこで PR している。特に藤田・大塚両氏は大友氏遺跡や街歩きのボランティアガイドで活躍、ベテランの域に達してきた。頼もしい限りである。

なお、先日祝祭の広場で開催された「NPO 博」での報告をパワーポイントでやろうとしたところ、パソコンの不具合で中止、ここで写真で紹介する。

写真左：ブースで書籍販売(4冊販売)　右：ステージでフォーラム in 大分と in 豊後大野の模様、その他をスライドで紹介した。

下は会場風景

② 来年度のフォーラム構想（たたき台を基に意見交換）

「大友氏と女性たち」／国東大会で奈多夫人が主人公となるが大分でも連動し、初代能直の母・利根局や正室・風早禅尼深妙・親秀正室三浦家連娘・後室の太政大臣藤原通光室とその娘たち、闇千代、吉岡妙林尼、鬼御前ほか。以上を話そうと思っていたが時間的に触れずじまい。

牧達夫氏は国東で開催する以上六郷満山は外せない、話はそこから広げ田原氏、吉弘氏、国東の浦部衆につなげたい。

この日は時間的に他の意見を聞くことはできなかった。みんなの意見を集約して3月中には具体的に詰めたい。

③ 九州の南北朝（1）要約文　　工藤　大輝

1・懐良親王の九州下向（1340年代）

後醍醐天皇は吉野に南朝を開いたものの、有力武将を相次いで失ったため挽回すべく二人の皇子を地方に派遣した。そのうちの一人が懐良親王だった。懐良親王は当初は北部九州から上陸しようとしたが幕府方に阻まれたため薩摩に上陸、肥後の菊池氏の協力を得て北上した。

一方の足利尊氏が南朝方への押さえとして九州に残した一色範氏は幾度となく幕府に帰洛を申し出たが拒否されたため嘆願状を提出すると幕府は一門を派遣、このうち子の直氏は範氏をよく補佐した。

薩摩守護の島津貞久も嫡男を失いながらも幕府方として南朝方の城を攻略するなど奮戦した。

しかし観応の擾乱に巻き込まれる形で足利尊氏の庶子直冬も九州に上陸したことで九州は混迷を極めた。当初幕府方だった少弐頼尚は娘を直冬に嫁がせて直冬方となってしまったことで、範氏父子は長門へ転進したが再び九州に上陸すると直冬方を破った。直冬は不利を悟り、養父直義という後ろ盾を失ったこともあって長門へ転進した。

範氏父子はその後菊池勢に敗れたため京へ逃亡したことで少弐頼尚は幕府方に復帰し大友氏時とともに南朝方に対抗しようとした。そして菊池武光・懐良親王らと筑後川で激突した。この筑後川の戦いでは頼尚の子直資が戦死しただけでなく、武光と懐良親王も負傷するなど元寇を上回る被害をもたらした。

その後少弐勢は菊池氏と合戦したが敗れ大宰府から撤退したことで懐良親王・武光は大宰府への入部を果たし征西府の全盛期が始まった。

幕府は一色氏に代わる鎮西管領として斯波氏経を派遣した。氏経は大友氏時を頼り高崎山城に籠り南朝方に対抗しようとした。すると武光は弟武義を大宰府の守将とし豊前・豊後方面に出陣した。その隙に氏経は子松王丸を総大将とし大

宰府を攻撃させたが、武義の必死の抵抗により敗れ、その報を聞いた氏経は周防に撤退した。
　次いで幕府は渋川義行を新たに鎮西管領として派遣したが、南朝方が中国西部の制海権を握っていたため義行は備後以西に進めず結局更迭された。
　そして業を煮やした幕府はついに今川貞世（了俊）を派遣したのである。

※本文はかなり長く詳細を極めているため要約したものです。全文はホームページに掲載しますのでご覧ください。

事務局より
大友氏顕彰会・大河ドラマ推進協議会の「合同新春の集い」告知は 2 枚目裏面参照。

出席者／牧達夫、若杉孝宏、佐藤弘俊、大塚雄一郎、藤田賢治、林壯一朗、江藤孝文、呉藤秀昭、工藤大輝、姫野建治、廣岡鎮也、藪紘一、小野美佐子、小森健治、北島俊一の 15 名